

第二回シンポジウムを終えて

大阪樟蔭女子大学サイクルプロジェクト取組責任者 川上正浩

何よりも、嬉しいシンポジウムであった。

今回のシンポジウムは、サイクルプロジェクトと“ソト”との関係を見つめるシンポジウムであったと言える。

まず1つ目の“ソト”は、追手門学院大学である。

追手門学院大学のキャリア開発部長であられる三川俊樹先生に、追手門学院大学におけるキャリア教育の取り組みについてお話しいただくことができた。この取り組みは『追大型自主自立キャリア形成支援モデル』と呼ばれており、キャリアとは「人生」「生き方」であるという考え方、キャリアデザインとは「自分の人生を設計して、その夢や希望を実現するために必要な知恵と力を身につけること」であるという考え方は、まさにサイクルプロジェクトと通じる取り組みであると思う。

そうした意味で、本学の“ソト”での、志を同じくする取り組みのお話を聴かせていただくことは非常に嬉しいことであった。

そして2つ目の“ソト”は、インターンシップである。

今回のシンポジウムは、サイクルプロジェクトの中でも、大学から、社会へ出かけていくインターンシップの部分、特に学生提案型インターンシップの部分に焦点を当て、これに参加した学生達に、自らの言葉で発表やパネルディスカッションを行ってもらった。彼女らの声を通じて、本学と提携いただいているさまざまな企業各社の現場という“ソト”で、彼女らが何を得て、どのようなジェネリック・スキルを伸ばすことができたのか、というところが共有できたと考えている。

そして、冒頭にも書いたように、彼女らが自分自身の声で、自分自身の成長を語ってくれるのを非常に嬉しく聴くことができた。

彼女らは、“ソト”である提携企業各社の重要な経営戦略の一端に携わる非常に厳しい状況の中で、「やり遂げる」ことを学んできてくれたのだと思う。これは非常に嬉しいことである。ただ、なんとかこれを大学という“ウチ”ではやれないのだろうか。もちろん、“現場”というものの持っている意味の大きさや、作り物ではない“本物”の持つ意味の大きさはわかっているつもりである。しかしそれでもなお、彼女らにおける“ウチ”と“ソト”の感覚を、今一度、“ひっくり返してやる”ことができないかな、というのが現在考えるべきことの1つであるのかもしれない。

繰り返しになるが、現場であり本物である、提携企業各社の理解と協力無しには、学生提案型インターンシップはこれほど大きな成果を挙げることができなかった。ここに感謝の意を表するとともに、これからもご協力をよろしくお願ひしたいと思う。